

フラグシップ・ニュース 拝啓社長殿

トップのための経営財務情報

第468号 この資料は全部お読みいただいて130秒です。

今回のテーマ： IFRSに見る、会計が向かう新たな道—財務データの新たな視点

IFRSとは

今話題の「IFRS」ですが、これは「国際財務報告基準（International Financial Reporting Standards）」の略です。2005年の欧州での強制適用が決定打となり、現在世界100カ国以上が採用する国際会計基準です。

IFRSで何が変わる？

日本でも数年後のIFRS強制適用が現実味を帯び、「IFRS対策」が関係者の間でちょっとした騒ぎになっています。IFRSは現行の会計基準と何が違うのでしょうか。

報道その他では、個々の相違点が多く挙げられています。会計処理方法の違い（例えば、のれんの非償却）、評価方法の違い（例えば、公正価値評価）、損益計算方法の違い（例えば、包括利益という概念）などです。

根本的な変化は・・・

現行基準が「収益費用アプローチ」であるのに対して、IFRSは「資産負債アプローチ」です。損益計算よりも、貸借対照表の資産負債の価値を第一義に考え、損益は純資産の増減として計算されるものという位置づけです。従来は、費用と収益の対応を重視し、期間損益計算の結果から貸借対照表が決まります。全く逆の考え方と言えます。こうしてIFRSでは、名称も左右を一致させる意味の「バランスシート」から「財政状態計算書」に変更されます。

投資家重視の情報とは？

IFRSが、中でも投資家への情報を重視し、投資意思決定に有用な情報を提供することに主眼を置いていることは注目されます。その情報は必然的に「将来」を強く意識したものになります。今までも「将来」の視点がなかったわけではありませんが、企業活動の「結果」である「利益」が、「過去」と「将来」の両方の要求を満たすと考えられてきました。

IFRSの根底にあるもの

しかし、激動の時代にある今日の投資家が要求する情報レベルからすると、利益は単なる過去の情報でしかありません。投資意思決定のために求められる将来情報の多くは、むしろ企業が将来に向けて蓄えているものを示す貸借対照表に存在する、ということになります。

こうして作成される貸借対照表は、企業価値評価に近いものとなります。IFRSは従来は会計の枠を超えてファイナンス的な思考に立脚しているとも言えるのです。

お見逃しなく！

従来は会計の概念を打ち破るかに見えるIFRSの問題は、実は一つの現象に過ぎず、現代会計が向かおうとしている方向性を示しているに他ならない。—こう捉えることもできます。

会計は時代の要請によって変化します。会計の劇的な変化は、激動の時代の現れです。IFRSの議論は、日本のみならず世界で今後も続きます。これらの議論から、会計はIFRSを超えてさらに進化する可能性を秘めています。

さしあたりIFRSの適用が自分の企業に直接どう影響するのか。これは避けて通れない問題です。しかし、大局的な目で捉えると、会計の視点は過去から未来への変革期にさしかかり、いま過渡期にあります。この会計の潮流、ひいては時代の流れを見誤らないことが大切です。